

特A地区を ブランド化し、 誇れる米づくりを 取り戻したい

株式会社藤原 藤原弘三

地域の見えない価値に光を当て、
地元の誇りを未来へつなぐ。
特A地区の松沢で生まれ育った
藤原弘三氏。受け継いだ土地を舞台に、
地域の新たな姿を
描き出そうとしている。

取材・文 ツチノヒト
写真 いのうえまろお



松沢の田んぼで農業部門の皆さんと。右から藤原弘三さん、藤原豊さん、
東野晋人さん、藤原隆夫さん。農業部門には戸田恵造さんも。

カッコいい大人の姿を 地元の子どもたちに見せたい

山田錦の特A地区に指定されている加東市東条の松沢地区。本特集の冒頭で紹介した巨大竜のある地域だ。地元の人たちが「まった」と呼ぶこの地で生まれ育った藤原弘三さんを、ツチノヒトが初めて訪ねたのは2022年12月27日。熱い思いで事業に取り組むカッコいい大人が加東市にいる。ぜひ会ってみたい——そんな衝動に駆られたからだ。

弘三さんの本業は金属加工業。父の克弘さんが2009年に設立した株式会社藤原の専務取締役を務める。同社は製造するための鋳造の内側にはめ込む「中子」の一貫生産に強みをもつ。中子はバイクや新幹線などの部品づく

りに欠かせない。まさに日本のものづくりを支える緑の下の方持ち企業なのだ。

こんな誰が見ても根っからの製造業者なのに、藤原では2019年に鋳製の酒器をつくる雑貨部門（ブランド名称・N.A.K.A.G.O.）を立ち上げ、2022年には農業部門をスタート。さらに2021年には「松沢」の名前を冠した日本酒までつくっている。一連の取り組みを率いる弘三さんのインタビュー記事を読むと、「商品を使った人からの『ありがとう』が従業員に届くしくみをつくりたい」「特A地区のブランド力をさらに高め、生産者が誇りをもって米づくりに取り組めるように



専務取締役の藤原弘三さん（左）と父で社長の克弘さん

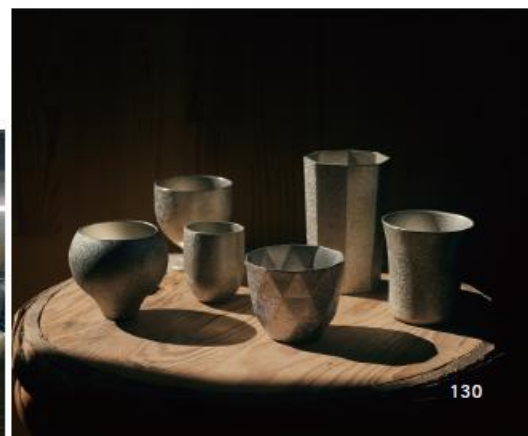
したい」と思いをまっすぐに語っている。

土地そのものが資産である松沢で生まれ育ち、製造業に従事する彼が、なぜ第一次産業の米づくりに原点回帰し、酒までつくってしまったのか。その先のビジョンをどのように描いているのか。初めて会った弘三さんは想像どおり、あるいはそれ以上に熱い人だった。

（こんな大人の話を地元の子どもたちが聞いたらワクワクするだろうな）

そう感じるとともに、『地元人』の制作が始まれば、メインの取材候補としてぜひ声をかけよう、そう確信したのである。奇しくも二大インタビューがダブル・コウゾウ（竹内紘三氏と藤原弘三氏）になったのも何かのご縁だろうか。

株式会社藤原の工場内。機械を操作しながら働く人たちの姿に職人魂を感じる。その現場から生まれる酒器をご覧あれ。酒器にはデザインを発案したスタッフの名前が刻まれている



「おもしろいことしょんやん」 幼馴染が農業部門の リーダーに

山田錦の稲穂がほんのりと色づき始めた2024年9月18日。いよいよ弘三さん、そして同社農業部門のメンバーの取材日がやって来た。

弘三さんの案内で松沢の田んぼに向かうと、農業部門の皆さんが最新鋭の4条刈りのコンバインをスタンバイして待ち受けてくれていた。農業部門のリーダーを務める藤原豊さんは弘三さんと同じ年。1980年生まれのふたりは松沢で幼少期から中学までとともに過ごした幼馴染だ。豊さんは別の地元企業で15年以上働いたのち、2022年の農業部門の立ち上げと

うね」と豊さんは話す。

その後、2021年に松沢地区の山田錦だけを使って醸した村酒「松沢」が完成したとき、弘三さんはその一升瓶を抱えて豊さんの自宅を訪ねた。

「そのときに『会社として農業をやりたい。一緒に仕事ができたらなあ』と専務が言うので、じゃあ手伝うわと」

まさに「軽いノリ」で豊さんの入社が決まり、農業部門が立ち上がったのだった。

高卒新入社員のイケメン。 トップの思いに共感して

豊さんがコンバインを運転し、松沢の地で大切に育てたお米を刈り取って



農業部門の藤原隆夫さんとともに作業に勤しむ東野春人さん。地域の次代を担う若手だ

コンバインを運転する豊さん。一年の実りが刈り取られていく。この日収穫したのはキヌヒカリ

もに退職し、藤原にジョインした。長年勤めた会社を辞めるのは大きな決断だったのでは? と豊さんに聞くと、「ご飯いこか、おうええよ、くらの軽いノリでしたね」

とこともなげに言う。

中学卒業以来、接点がなくなったふたりが再会したのは、弘三さんが海外(後述)から帰ってきて消防団に入ったとき。ある日の消防団の集まりで弘三さんが「松沢で育った山田錦だけで日本酒をつくりたい」と思いを語った。その場にいたメンバーの多くがマイナスの反応を示すなか、豊さんだけが「おもしろいことしょんやん」と前向きにとらえたという。

「専務(弘三さん)はファーストベンギン。今でこそ専務のビジョンを理解できる人が増えてきたけど、当時はなかなかわかってもらえず苦労したでしょ

いく。そのあとに続きながら、のこざり鎌を手にもって作業に動しむひとりの若者の姿がツチノヒトは気になった。

弘三さんに聞くと、高卒2年目のルーキー、東野春人さんとのこと。日焼け防止のためにロングTシャツとサンングラスを身に着けた、スラッとした長身のイケメン。出身は工業高校だという。なぜ藤原に? そう聞くと、「農業がやりたかったんです」と理由を話してくれた。

「実家のおじいちゃんが農業をやっている姿がカッコよかったんです。俺も高校卒業後は農業の仕事に就きたいと思ったけど、工業高校なので農業系の求人はない」

就職活動の時期を迎えた高校3年時、学校で開かれた企業説明会に弘三さんがやって来た。

酒米の産地であり、聖地——

「専務の話聞き、農業部門の募集をしていることがわかったんです。しかも本業は製造業なので機械加工の知識も活かせる。この会社なら好きな仕事ができる！　そう思って入社しました」

原付に乗っていた春人さんは藤原に入社後、バイクが趣味の弘三さんとふたりで温泉までツーリングに出かけた。

「専務と温泉に浸かりながら、こんな会社になりたい！　ってお互いに語り合ってた。好きな農業に取り組めて、機械も操れる。こんな楽しい仕事、一石二鳥やんって。会社の居心地もめっちゃいいですよ」

その言葉どおり、田んぼで働く春人さんは輝いていた。

「農業をやってみたくて思ってくれる若い子をもっと増やしたいですね。『米づくりしてる俺らを見てみい。カッコえやろがい』って」

「じゃあこの土地にお金を払いますか？」

弘三さんは田んぼの方向に視線を向けた。そう言われると返す言葉が見つからない。

「つまり目の前に価値があるのに、地元の人たちは気づいていないんです。僕はこの特A地区という、地元の見えな価値を見える化し、お金と人呼び込みたいんです」

神社の価値とは何だろう。宗教的な意味合いとは別に、昔からその場所に長く存在すること自体にも価値の一端があるように思う。杉の大木も、千年杉になると祈りの対象になる。

「この松沢の土は、少なくとも千年以上は他の地域に流出していないと聞いて

見えない価値を
可視化し
祈りの土地を
再興させる

刈り取りの現場をあにとすると、弘三さんは「ぜひ見せたい場所があるんです」と松沢地区を案内してくれた。村の田んぼが見渡せる、山裾の秘境のような場所。車を降りて視線を上げ、ハッとした。奥に巨大竜が横たわっている。そうか、あの場所か……しばし景色に見入っていると、弘三さんが唐突に問いを投げてきた。

「神社に行くと、お賽銭を納めますよね？」

そうですね、とツチノヒトは頷く。

います」

弘三さんの言葉を聞いて、少しだけ理解が進んだ。この土地自体が、千年杉と同じく祈りの対象なのだ。昔からこの地で米づくりをしてきた人たちは豊作を祈り、土を守り継いできた。酒米の産地であり、聖地でもあるこの特A地区の価値を、もう一度取り戻したい——弘三さんは田んぼを指差しながら続ける。

「見てください、ちょうど角に木が植わっていますよね。昔は牛に引かせて田んぼを鋤くこともあったので、その目印や牛をつないでおくために、僕のおじいちゃんが植えた木なんです。田んぼには、昔の人たちの思いがこもっているんですよ」

地元の人間でもほとんど知らない松沢地区の秘境地。先人たちがこの土地を守り継ぎ、継承した現代の地元人がいま躍動している

地元への思い、その原点

世間に対して息苦しさを感ずる子どもだった。小学4年時のエピソードをいまでも覚えている。

「校長先生の話を聞いていたとき、顔が見えないので体を横にずらしたら怒られたんです。ちゃんと聞きたいから顔を見ようとしたんだけど、『なんで?』って。整理させたいのか、話を聞かせたいのか、目的はどっちなんやと。子どもながらにもやややしたのを覚えてます」

廊下を走ったらいけませんと注意はされても、なぜ走ってはいけないのかを教えてくれる先生はいなかった。結局、理由もわからずに校長室に呼び出されて、怒られた。

「大人だって完璧な人なんていない

じゃないか。そんな人の言うことを、なんで聞かなあかんねんって。生意気な子どもでしたね」

幼少期は家族が大好きで、祖父母や父と一緒に田んぼによく出ていた。「米づくりに励むおじいちゃんや父の姿がほんまカッコよかった」と振り返る。

「それに毎年、刈り取りを終えた翌日の夕飯がすき焼きやっただけです。それがめちゃくちゃ楽しかったです。たまごは1人1個やで、みたいな食卓の団欒が嬉しかった。僕にとつて米づくりとは、おじいちゃんや父の背中のカッコよさ、そしてすき焼きの思い出がセットになった。いいもの。だったんです」

この幼少期の原体験が、地元を思う現在の活動につながっている。

「松沢を離れるのが、じつはちょっと嬉しかったんです」

地元の仲間といえるのは嫌いではなかった。でも、田舎のグループは仲間を大切にする一方で、他を排除しようとする特有の雰囲気がある。

「岡山の高校に進学したらめっちゃ楽しかったんです。やがて、自分らしく生きられるのはこっちの世界かもしれない、そう思うようになりました」

地元ではゴミを拾うと「お前になにカッコつけとんねん」とからかわれたが、元来、弘三さんは考えるより先に行動に移すタイプ。「自分はゴミを拾う側の人間」だと、人にもまれながら徐々に自己形成を図っていった。

高校卒業後、今度は19歳でニュージーランドに留学している。日本を飛び出

父の克弘さんに抱かれる幼少期の弘三さん。幼い頃から田んぼ仕事を見て育った



「俺ひとりだけでいけるわ」
人は一瞬で変われる

中学を出ると、地元を離れた。自分が思うことをやると怒られる。そんな世間への反発心もあり、次第に地元のグループとつるむように。中学の先生から岡山の私立高校を勧められ、送り出された。

した理由を訊ねると、意外な経緯を語ってくれた。

「当時の光景はいまでも鮮明に覚えてて。家に帰ってこたつでこのテーブルを見ると、飛行機のチケットらしきものが置いてある。隣のキッチンでネギを切っていた母に『これ何なん?』って聞いたら、『あんなのや。あんな来週からニュージーランドやから』って言われて」

普通に考えると意味がわからないが、弘三さんはとっさに「親から解放される」と思ったという。親の言うことも聞きたくない、そんな状況にあった弘三さんを使い、「可愛い子には旅をさせよ」との親心だったのだろうか。

この海外での経験が弘三さんを覚醒させた。1年間のオープンチケットを



人生の転機となったニュージーランドへの留学。当時は漫画・アニメ『ドラゴンボール』に登場する超（スーパー）サイヤ人のような髪型だった



握りしめてニュージーランドの空港に降り立つも、円からドル（NZD）に両替する方法がわからない。右往左往していると、偶然遭遇した日本人修士旅行生のあとを追って無事に両替に成功。

「僕の海外がそこから始まりました」
まずは英語を学ぶために語学学校に入学。ある日の授業中、斜に構えてレツドルを飲んでいると、「君はなぜここに来たのだ？」と問われたので「My father just said（父に言われたから）」と答えると笑いが起きた。異国の地でウケたのだ。

「異なる言語で人とつながる瞬間を経験し、世界が変わりました。『あ、俺はもう、ひとりでいけるわ』って。一瞬です。人は一瞬で変われます」

ニュージーランドでの1年を経て、オーストラリアでの就労も経験。カジノで負けて手持ちの現金が3ドル（AUD）になるピンチを迎えながらも、持ち前の行動力と社交性を活かして仕事に励み、日本円で60万円を貯めて帰国した。外に出て成長し、松沢に還ってきたのだ。

「ありがとう」が もらえる仕事を

2009年3月に中子の製造工場を立ち上げた父に誘われ、2010年に藤原に入社した。飲食の仕事を経た29歳のときだった。当時は両親と、パート従業員が2人だけ。

入社したころの弘三さん（左）。当時から在籍している大濱久佳さんと。「やったるで」という雰囲気ですでに出ている



「その会社の状況を見て思ったんです。これでは新卒者や若い人を雇えないって」

もののづくりを支える重要な仕事に違いない。しかし、中子は使い終えたと壊すので、あとに何も残らない。中子とは何なのか、どこに使われるものなのか、ほとんどの人は知らないだろう。

「若い人に働きたいと思ってもらえる会社にしたい。そのために従業員の頑張りが外に見えるしくみをつくらう、仕事が楽しいと思える環境に変えよう、そうやって自社を見直していったんです」

人材不足を受けて「採用」にこだわる企業は多いが、弘三さんは「定着率」



使い終えた中子。役目を終えたと壊される

にこそ問題解決のヒントがあると考えた。

「定着率に着目すれば、外ではなく内側に目が向きますよね。そこで働く環境を変え、制服を導入し、名刺をつくり、何をやっている会社なのかわかるよう改善していきました。さらに中子の製造だけでなく、金型の製造から鋳造、

加工まで、一貫生産できる体制を2年かけて整えていったんです」

結果、若い職人が増え、社内に活気が生まれ始めた。でも、何かが足りない。「それは『ありがとう』というひと言だと気づきました。急ぎの仕事を納めに行っても、『そこに置いとけ』と言われるだけ。お客様からの『ありがとう』がもらえる仕事をつくってあげたい。そのための手段としてメーカーになろうと思いました」

自分たちが 誇れるものをつくる

そこで思い立ったのが「酒器」をつくることだった。ヒントになったのは、

お酒好きの父の克弘さんが「味がまろやかに」と集めていた錫製の酒器。鋳物づくりの技術を活かせるし、顧客に直接届けられる。2018年ごろから試作を開始し、鋳型を温める温度の調整などの試行錯誤を続けた。

「そして完成した酒器の試作品を手にした従業員がふとつぶやいたんです。『これ、家を持って帰っていいですか。自分の仕事を親に見せたいんです』と。その言葉を聞いた瞬間、『これや!』と思いました。使い手に直接届けられる喜びこそ、ものづくりの本質やつて」

こうして誕生した酒器のブランド名は「NAKAGO」に決めた。

「ものづくりに不可欠な本業を絶対に忘れない。中子を軸に周りのすべての人たちを幸せにする。この思いをブランドに込めて、ローマ字表記の『NAKAGO』にしました」

この「NAKAGO」ブランドの酒器には、それぞれデザインした人の名前を刻んでいる。

「自分の名前が入ると純粋に誇らしく、嬉しいですね。そんな喜びを従業員一人ひとりに感じてもらいたいです」

村の日本酒をつくりたい

自分たちが誇れるものをつくる——この思いは、「米づくりはいいもの」という原体験が崩れた経験がもとになっている。

海外での学びを終えて帰国後、消防団に入って地元の若手と話す機会が増えた。

「僕はつきり、誇りをもって山田錦を育てていると思っていたんです。でも、

そうじゃなかった。若い子たちと話をすると、『田んぼを継ぐ人がいないから仕方なしに』『隣のおやじさんがやめたから』といった答えしか返ってこない。特A地区という唯一無二の地域で最高の酒米をつくり、それが日本酒になって多くの人に喜ばれていることが見えていなかったんです」

ショックだった。「いいもの」だと思っていた米づくりが、地元の負担になっている。

「この若い子たちのモチベーションを上げるために何ができるだろう。そう考え、閃きました。松沢の山田錦で日本酒をつくらう! って」

その思いを初めて語ったのが、豊さんと再会した消防団での集まりだ。ところが、「そんな無理やろ」と否定的な意見を言うか、無反応のメンバーがほとんどだった。そんななかでも、豊

「このふたつが両親の酒器なんです。写真を撮ってもらえませんか」。弘三さんはそう言うと、静かに並べた。右が父・克弘さん (katsuhiro's 鶴-TSURU-)、左が母・寿代さん (suzuyo's 壽-kotobuki-) の酒器。誇り、喜び、悔しさ、夢……いろんな思いが酒器に込められている

さんだけが前向きにとらえてくれて酒造りが始まった。J Aみのりに明石の酒屋、そして姫路の壺坂酒造の協力を得て、2021年に初めての村酒が完成。その名も「松沢」。呼び名はもちろん「まった」だ。5月に販売を開始し、11月に完売する人気ぶりだった。

「村酒造りでこだわったのは、村の人たちに関わってもらうこと。公民館に集まってみんなで味を決め、ラベルのデザインは村に回覧板を回してアイデアを募りました。ほら、ラベルの上に城のイラストがあるでしょ。松沢には昔、城があったんですよ。すごくないですか」

誇らしげに語る弘三さんの姿を見て思った。自分たちの村で育てた山田錦を使い、自分たちが最高に旨いと思える日本酒を造る。こんなに誇れるものづくりがあるだろうか——と。



「どうぞどうぞ。どんどんやれ」

2023年には第2弾の村酒「小澤」、そして2024年5月には第3弾の「新定」が完成した。

「自分たちが美味しいと思う日本酒を村ごとに造っています。自分たちが育てた山田錦がお酒になり、多くの人たちに楽しんでいただける。それが村の人たちの喜びになり、特A地区での米づくりに誇りをもてるようになる。そう信じています」

実際、「ワシがつくった米が酒になった！」と喜ぶ声が聞かれるようになってきた。

「今後、26ある東条地区のすべての村で村酒を造っていきます。米づくりって楽しい——そんな姿を次の世代に見せることで、農業に若い人たちを呼び込む好循環を生み出したいんです」

各村で育てられた山田錦のみを使い、

26の村酒を造る。そこには課題があった。通常の出荷ルートでは、複数の地区の米が混ざってしまうのだ。現実離れたアイデアだけに、冷笑されることもあった。あるときは、「ライスセンサーでもつくったらどうですか」と、無理に違いないといわんばかりの態度で言われた。

「その言葉を聞いたつぎの瞬間、僕は打ち合わせはそっちのけで、妻にラインを送っていました。『ライスセンターつくるから見積もり頼む。補助金の情報収集もお願い』って」

この瞬発力。この行動力。弘三さん



自分たちが育てた米で 最高に旨い酒を造る

の真骨頂だ。しかもいつときの感情ではない。2022年、大規模投資をして自社でライスセンター（収穫したものを荷受し、乾燥、もみすり、選別、出荷までおこなう施設）をほんとうに完備し、農業部門を立ち上げてしまった。豊さんがジョインし、春人さんが新卒で入社したのもこのタイミングである。志と熱をもった人間の周りに、人は集まるのだ。

こんな息子姿を、父の克弘さんはどう見ているのだろう。藤原の工場で黙々と作業に打ち込む克弘さんに聞いてみると、「本業をやると言ってくれて嬉しかった」と語り始めた。

「でも彼なりに働いてみて、当時の状況では人は来てくれないと思ったんでしょ。『こんなことをやりたい』と提案してきたので、私からは『どうぞどうぞ』と。『ケツは拭いたる。どんどん

やれ』と伝えました」

この克弘さんの言葉を聞いて、ふいに涙が出そうになった。親族内承継の難しさはよく耳にするが、この父にして、この息子あり、そんな関係性がすてきだと思った。

入社以来、スピード感をもって社内改革を進めてきた弘三さんは、当時の従業員への感謝を忘れない。

「最初から働いてくれている人たちが今も残ってくれているんですよ。よう辞めずに、ついてきてくれました……」

そう言うと、弘三さんの言葉が途切れた。下を向き、こみ上げてくる思いに堪えている。

「ほんまにね、この人たちだけは、絶対に裏切られへん」

弘三さんはこの地で本気で生きていく。そう思った。



悔しさをバネに大規模投資をして自社で完備したライスセンターの様子。大型乾燥機がその覚悟を物語る

挑戦する後継者の弘三さんを側面でサポートする克弘さん。この写真を見るだけでふたりの関係性がわかる



酒を真ん中に、 村全体を ひとつのホテルに

2024年10月17日、松沢の圃場に台湾から訪れた人たちの姿があった。総勢約30名。山田錦の最高の生産環境を誇る特A地区。その田んぼに座敷をしつらえ、景色を愛でながら昼食を楽しんだのち、参加者が自ら刻印した自分だけの錫製の酒器で日本酒を利き酒する。その日本酒は、もちろん各村の山田錦で醸した「松沢」「小澤」「新定」だ。仕掛人の弘三さんは思いを語る。

「僕が子どものころ、おじいちゃんや父が農業をする姿がカッコよかったんです。でも『こんな仕事はやるもんじゃない』と聞かされてきました。儲からんし、

……すべてを掘り下げていくと北播磨の特A地区にたどり着きます。この土地をもっと取り上げていきたい——そんなコロナ以前の6年越しの企画に対して手を挙げてくれたひとりが藤原さんでした。彼らは米づくりから日本酒造り、酒器製作から利き酒まで、いろんなバリエーションをもっています。今回の台湾ツアーに相応しいと思い、行程に組み込ませていただきました」

この三宅さんの思いを受けた弘三さんが松沢の田んぼでのモデルプランを立て、今回の実現に至った。お金を払ってまで、海外からでも訪れたいなる酒米の聖地。あの神社の話がここに通じているのだ。

「この土地には、五感で楽しめるだけの



画像提供：エミュードローンアカデミー

画像提供：エミュードローンアカデミー

10月17日におこなわれた台湾ツアーの様子。このイベントを取り仕切ったのは弘三さんの妻の美智代さん。イベントの最後に弘三さんがその労をねぎらい、思わず涙する美智代さん

生まれ育った この土地で 本気で生きる

商品としての価値がある」と弘三さんは力を込める。
「だから僕は、いずれ松沢という村のホテルをつくりたいんです」
古民家を改修し、酒蔵を建て、松沢の村全体をホテルにする。

きつしと。いまなら、おじいちゃんや父の気持ちわかります。こんなに大変な仕事を子どもや孫にさせたくない。では、なぜ僕がこんな活動をしているのか。田んぼを舞台に活動する姿を地域に見せることで、特A地区をもっとブランド化し、守っていかねえかん状況をづくりたいんです。同時に、見過ごされている地域の価値を見える化し、人を呼び込んで地元を盛り上げたい」

ひょうごフィールドバザリオン（地域の活動の現場そのもの）フィールドを地域が主体となって発信し、多くの人に来て、見て、学び、体験してもらう取り組みの一環として開催された今回の台湾ツアー。企画した兵庫県企画部万博推進局長の三宅隆之さんは弘三さんについてこう話す。

「兵庫の米づくり、土地、土壌、水利

「そして訪れたお客様が東条地区の26
の日本酒を味わい、この土地の郷土料
理に舌鼓を打つ。景色を楽しむ。東条
地区の真ん中にお酒を置き、地域をひ
とつにしたいんです。僕にはもう、そ
の絵が見えているんですよ」

特A地区での活動を始めたころは誰
からも理解を得られず、「当時の僕は何
者でもない、ただの石ころだった」と
振り返る。

しかしいま、そんな弘三さんと同じ
ビジョンを見て、同じ方向をめざせる
仲間が集まってきている。松沢の物語
は、まだ始まったばかりだ。

この土地を、
俺たちが
守っていく